

Association between care rehabilitation and the risk of fracture hospitalization in people with Parkinson's disease

劉, 寧

<https://hdl.handle.net/2324/7165100>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (医学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	劉寧 (LIU NING)
論文名	Association between care rehabilitation and the risk of fracture hospitalization in people with Parkinson's disease
論文調査委員	主査 九州大学 教授 二宮 利治 副査 九州大学 教授 中島 康晴 副査 九州大学生体防御医学研究所 教授 上住 聡芳

論文審査の結果の要旨

パーキンソン病患者における転倒、骨折のリスクは高く、骨折をいかに予防するかは公衆衛生政策上の重要な課題の一つである。申請者らは、75歳以上、要介護度は軽度から中度までのパーキンソン病患者を対象として、継続するリハビリテーションの利用と骨折入院リスクの関連性を検討した。

本研究では、2014年4月から2018年3月の医科保険レセプトデータと介護保険レセプトデータに含まれる75歳以上の要支援1～要介護3に認定されているパーキンソン病患者2,177人を4年間追跡したデータを用いて、後方視的に解析した。対象者のうち、222人が継続的に介護リハビリテーションを受け、1,955人が受けていなかった。介護リハビリテーションの継続の有無において、臨床背景が異なっていたため、傾向性スコアを作成し、スコア値を用いて1:4の比でマッチングを行い、介護リハビリテーション有群に222人、介護リハビリテーション無群に888人を解析対象者として選出した。エンドポイントは骨折による入院とした。統計解析として生存時間分析を行い、ハザード比の算出には、Weibullハザードモデルを用いた。

その結果、介護リハビリテーション有群では、無し群に比べ骨折による入院の発生率は、3年間追跡以降、有意に低かった（3年間追跡：年齢による層別Log-rank検定 $P=0.04$ ；4年間追跡：年齢による層別Log-rank検定 $P=0.01$ ）。介護リハビリテーション有群は、無し群に比べ骨折により入院するリスクが、有意に低かった（3年間追跡：ハザード比0.54；95% CI 0.29-0.99； $P=0.047$ ；4年間追跡：ハザード比0.52；95% CI 0.30-0.88； $P=0.010$ ）。

以上の成績は、介護度が軽度から中等度のパーキンソン病患者にとって、早期からの介護リハビリテーションサービスを継続的に受けることにより骨折による入院のリスクが低下することを示唆するものであり、この方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがほぼ適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士（医学）の学位に値すると認める。